

「発達診断」という活動の意味を問い直す

企画：藤野友紀（北海道大学大学院教育学研究科）
平沼博将（福山市立女子短期大学保育科）
司会：藤野友紀（北海道大学大学院教育学研究科）
話題提供者：藤野友紀（北海道大学大学院教育学研究科）
河原紀子（中央大学文学部）
平沼博将（福山市立女子短期大学保育科）
指定討論者：浜田寿美男（花園大学社会福祉学部 / 非会員）
小塚 拓（島根県立浜田ろう学校 / 非会員）

療育や保育実践における「発達診断」の重要性は周知のことであるが、そもそも「発達診断」とはどのような場でありどのような活動なのかを心理学的視座から問い直す議論はほとんどなされてきていない。本企画は、「発達診断」の心理学的再検討を通して、未来の「発達支援」のあり方を探るための道標を得ることをめざしている。

話題提供 1：藤野友紀

「インタラクションとしての発達診断・検査場面では何が起きているのか」

発達診断とは、何をどのように診断することなのだろうか？ 発達診断はどのように発達支援につながるのだろうか？ 本報告では、まず従来の「診断」「相談」の捉え方の特徴とその問題点を整理し、それに対して、発達のアプローチによる「診断」「相談」の特性と意義を提起する。「固定的な課題への反応を一方向的に観察される者」としての対象者から、「検査者とのインタラクションを通して課題の意味を生成していく能動的な行為者」としての対象者への視点転換の必要性と有用性、その場合の検査場面の記述の単位のあり方を問うことによって、発達診断や発達支援の未来のかたちとそれに迫る発達心理学的方法論を探っていきたい。

話題提供 2：河原紀子「プロセスとしての発達診断・療育施設の発達診断事例から」

本報告では、就学前母子通園施設に通う子どもの2年あまりにわたる発達診断事例を取り上げる。この事例では、「研究者による発達検査」「研究者による療育場面の観察」「実践者による実践記録」「実践者による発達検査場面の観察」が検討資料となるカンファレンスを年2回の割合で実施してきた。一般的に、“発達検査の結果から発達診断を行い、それをもとに療育内容を検討する”という暗黙の前提に立ってカンファレンスが行われる場合が多いが、実際にカンファレンス場面で起きていることはもっと複雑である。今回は、課題場面の微視的分析とカンファレンスの長期経過分析を通して、カンファレンスにおいて実践者と研究者が何をどのように読み解いていったのかを検討し、発達診断とは誰によってどのように行われるものなのかを考えていきたい。

話題提供 3：平沼博将

「子どもの絵の診断的利用の問題点・描画活動の相互行為分析から」

私たちは「絵は心を映す鏡である」という“素朴描画観”を持ってしまっている。1970年代以降のプロセスアプローチ(描画過程の詳細な分析)は、そうした短絡的解釈の反証を行ったが、保育・教育の現場では、今なお、発達や性格を診断するための道具として、子どもの絵が利用され続けているように感じる。そのため、絵の「指導」も、どちらかという望ましくないものと考えられ、実際には「指導」が行われていたとしても、保育者自身がそれを自覚できないでいることも多い。本報告では、そうした問題意識から、保育における描画活動を「保育者と子どもの相互行為」として捉えることの必要性を指摘するとともに、「子どもにとっての描画活動の意味」を問い直すことで、保育・教育現場に根強く残る診断主義的偏向に斬り込む視点を探っていきたい。

上記の話題提供に対して、「障害」という現象の丁寧な検討から発達心理学の再考を試みておられる浜田氏と、障害児教育の現場で実践を積み重ねておられる小塚氏からコメントをいただき、さまざまな参加者の方々の視点も重ね合わせて問いを深めていきたい。